

SHOW HEYシネマルーム

★★★

Data

監督・脚本・プロデューサー：アレックス・プロヤス

出演：ニコラス・ケイジ／チャン
ドラー・カンタベリー／ロー
ズ・バーン／ララ・ロビンソ
ン／ベン・メンデルゾーン／
ナディア・タウンゼント／ア
ラン・ホップグッド／ダニエ
ル・カーター

ノウイング

2009年・アメリカ映画
配給／東宝東和
122分

2009（平成21）年8月23日鑑賞

ホクテンザ2

👁️👁️ みどころ

「地球滅亡の日」をテーマとした映画は『ディープ・インパクト』（98年）や『サンシャイン 2057』（07年）など数多いが、大切なのはアイデアと脚本。そして、リアリズムでいくか、ファンタジーでいくかの選択。しかし、本作のそれはいかに？ニコラス・ケイジがいかにアメリカ的な父親役を演じているが、本職の宇宙物理学教授としての能力の活用は？そして、地球滅亡の阻止は？さらに、タイムカプセルというアイデアの成否は？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■タイムカプセルのアイデアは面白い■□■

映画は冒頭に、小学生のルシンダ（ララ・ロビンソン）とクラス担当の教師ミス・テイラー（ダニエル・カーター）を登場させ、学校の創立記念日にタイムカプセルを埋め込む様子を描いていく。このアイデアを思いついたのがルシンダだ。ミス・テイラーは一人一人の生徒に思い思いの絵を描いてタイムカプセルの中に入れるよう指示したから、クラスのみんなどは大喜びでロボットやロケットの絵を描いていたが、なぜかルシンダだけは訳のわからない数字を羅列。こりゃ一体どうということ？

今の時代の思いを紙に書いてタイムカプセルの中に入れ、何十年、何百年後の時代の人々にそれを送るという面白いアイデアは昔からあるが、それを映画に活用したら・・・？本作はそんなアイデアで製作されたが、タイムカプセルを埋めるそんな冒頭のシーンは1959年。50年後の今そのタイムカプセルが開封され、あの時の生徒たちが書いた手紙が、2009年の今を生きる小学生一人一人に手渡されることになったが、さて数字が羅列された、ルシンダが書いた紙を受け取るの一体誰？

■□■父子の絆は強固だが■□■

ニコラス・ケイジは今日までさまざまな役柄を演じてきたが、今回は妻と死別し小学生の一人息子ケイレブ・ケストラー（チャンドラー・カンタベリー）と二人で今をしっかりと生きている宇宙物理学の大学教授ジョン・ケストラーの役割を演じている。もっともジョンの親戚の娘、グレース・ケストラー（ナディア・タウンゼント）が訪ねてきた時の会話を聞いていると、父親であるケストラー牧師（アラン・ホップグッド）との間には深い確執があるようで、二人の間は没交渉らしいが、その行く末は？

他方ケイレブは耳が不自由で補聴器の助けが必要らしいが、なぜそうなったのかについてはストーリー上明らかにされず、この補聴器はケイレブが不思議な声を聞くようになるについての小道具のように使われている。しかし、後に登場するダイアナ・ウェイランド（ローズ・バーン）の娘であるアビー・ウェイランド（ララ・ロビンソン）は何の道具の助けを借りることもなく時々不思議な声を聞くようになることを考えると、別段補聴器という小道具は必要ないのでは？

それはともかく、ジョンの同僚の大学教授フィル・ベックマン（ベン・メンデルソーン）からの食事の誘いすら断って、息子ケイレブの世話をしているジョンの生活ぶりを見る限り、また毎晩「You and me together!」と言葉を交わし、こぶしを合わせ合っている二人の姿を見る限り、父子の絆は強固そうだが、本作のキーワードである「7月、地球消滅」の前ではさて・・・？

■□■やっとダイアナに接触できたが■□■

ケイレブが受け取った紙に書かれた数字を、あるきっかけによってジョンが分析を始めるところで導入部は終了し、そこからストーリーは本格性を増してくる。偶然ウイスキーをこぼしてしまったことで目についた「299691101」という数字が、2001年の9・11テロで、2996人の犠牲者を出したことを意味していると読み取ったジョンがさらに数字の分析を続けていくと、何の意味もない数字の羅列だと思っていた紙は、何とも不気味な予告をしていることに気付いたから大変。つまり、何年何月何日に北緯何度東経何度の場所で大惨事が起こり、そこで何名が死亡するという数字とピッタリ一致しているわけだ。今から50年前の1959年に、あの小学生の少女ルシンダがなぜそんな不気味な予告を？

そんな数字の意味に気付いたジョンは半信半疑で友人の大学教授であるフィルに相談を持ちかけたが、それは考え過ぎだと一蹴されてしまうことに。しかし、明日その数字の予告どおりの惨事が本当に発生するとしたら？飛行機の墜落事故という形でそんな現実を目にしたジョンが、さらに続いて予告どおりの場所、日時に地下鉄の衝突事故を目撃し、数字どおりの死者が出ることを確認するとしたら？

こうなりゃ、その数字を書いた当の本人であるルシンダを探す必要があることは明らかだ。そこでジョンがたどり着いたのがルシンダの娘であるダイアナだが、話をきくと既にルシンダは死亡したらしい。私はジョンはもう少し丁寧に客観的状况やさまざまな前提条件をダイアナに説明すればいいのにとと思うのだが、いきなり問題の核心に迫る質問ばかりぶつけてくるジョンをダイアナが気味悪く思ったのはある意味当然。したがって、やっとならぬうちにジョンはルシンダの娘ダイアナに接触できたのに、真相究明へのアプローチが少し手間取ったのはジョンの説明方法が悪かった面も？

■□■タイトルの意味は？■□■

最近の邦題は解説調になるケースが多いが、本作は原題「Knowing」をカタカナにしただけ。つまり、今の平均的な日本人はKnowを知っているから、その名詞形であるKnowingもわかるだろうと判断したわけだ。多分それはそれで正しいが、一体誰が何を知っているのかについては、本作を最後まで観なければわからないから、タイトルの意味もきくと十分理解出来ないはず。そして、この「Knowing」というタイトルは当然、50年前に埋めたタイムカプセルという導入部のストーリーと密接に関連している。

他方、プレスシートによると本作の脚本作りには8年間もかけたらしいが、地球消滅というストーリーをいかに感動的に描くかは極めて難しい。『ディープ・インパクト』（98年）では地球への大隕石の衝突を直前に回避出来たし、『サンシャイン 2057』（07年）は隊長達の決死的行動によって地球は滅亡から免れることができた。なるほどそう考えると、本作の「7月、地球滅亡」というショッキングな売り文句も単なる警鐘？つい、そう思いながら見ていたが・・・。

■□■「熱波のせい」と言われると・・・■□■

地球の温暖化やオゾン層の破壊が人類に対する重大な危機であることは明らかなが、それに対する私たちの対応は？

科学的分析の結果、本作のハイライトシーンの一つである飛行機の墜落や地下鉄の衝突が熱波によるものだと聞かされると、今年の夏の暑さも地球滅亡の警鐘では？と思わず感じてしまう。現実には今年の集中豪雨などが熱波のせいだとしたら、近いうちに地球は本作が描いているような結末に「熱波のせい」と言われるようになると本作を思い出して俄然注意を強めなければ・・・。

■□■リアリズムが好き？それともファンタジーが好き？■□■

映画には基本的にリアリズム路線とファンタジー路線があり、地球滅亡という大テーマを扱う場合そのどちらを選択するかで、テイストが大きく変わってくる。ちなみに『ディ

ープ・インパクト』は前者で『サンシャイン 2057』は後者？しかし本作では？

中盤のスリリングな展開を見ると本作は前者かなと思うが、ケイレブとアビーの耳にだけ聞こえてくるという不思議な声と、時々登場する不思議な風貌の男たちを見ていると、ひょっとして本作の本質は後者？そこら辺りにも注目しながら、映画後半の展開とその結末についてはあなた自身の目で。

2009（平成21）年8月24日記